あらすじ

アフロディーテの指先

わたしはボタンを押す夢を見る。夫の体を流れる輸液。それに繋がったボタンである。赤のボタンを押せば停止する。夫は三年前に脳出血で倒れ、それ以降植物状態である。夫の傍らで生きるわたしもまた植物である。

三年間の中で、娘は結婚し、息子は就職し、周りは前へと進んでいく。わたしは一人取り残されたまま、夫の世話をするだけだ。眠り続けるだけの夫。遂に三つ目の病院へ転院しなくてはならない日がきた。

紹介状を手にした瞬間、わたしはボタンを押すことを決意する。植物として生きている夫とわたしに終止符を打つのだ。押すことは夫の命を止めることである。ボタンを押し病室を逃げるように出たわたし。

紹介状を持って医院を訪れるが、もう手続きの必要はない。夫を殺したのだから。その

先に見えた美術館。時間潰しにわたしは立ち寄る。

森閑とした美術館。先客の年配の男にわたしはいつもと違う感情を抱く。絵の話。植物の話。インドの乞食の話。

わたしたちは外のベンチでも様々な話をする。日が暮れて男は帰る算段をする。わたしの存在を忘れるだろう。わたしは男の指を銜える。せめてこの男の中に存在を残したい。

そして病院へ戻る。警察が待っているだろう、と覚悟するが、夫は生きていた。停止ボタンは長押しをしないと作動しないことを、わたしは知らなかった。

わたしは夫のオムツを変える。そして夫にキスをする。人生の秋を迎えた私たち夫婦。植物として枯れるまで共に生きていこう、と決心する。明日は紹介状を持ってあの医院へ行こう、と。

20 × 20